

行幸宴歌の世界

——天平十二年聖武行幸時の四泥能埒での歌から——

廣岡義隆

○キーワードⅡ好住・今案・おくる・さきく・丹比家主・萬葉集古義

一、はじめに

私はこれまで、天平十二年（七四〇）における聖武天皇の関東行幸に関わる一連の萬葉歌（6・一〇二九～一〇三六番歌）について、考察して来た（注1）。この歌群の中で、取り上げることのなかった「四泥能埒」での歌一首（6・一〇三二）とその題詞・左注を考察することによって、歌群全体を私なりに把握しようとするものである。

まず最初に、該当の歌群八首をここに掲げる。

十二年庚辰冬十月 依大宰少貳 藤原朝臣廣嗣 謀反發

軍 幸于伊勢國之時

河口行宮 内舍人大伴宿祢家持 作歌一首

河口之野邊尔廬而夜乃歷者妹之手本師所念鴨（6・一〇二九）

天皇御製歌一首

妹尔戀吾乃松原見渡者潮干乃瀧尔多頭鳴渡（6・一〇三〇）

右一首今案 吾松原在三重郡 相去河口行宮遠矣 若疑

御在朝明行宮之時 所製御歌 傳者誤之歟

丹比屋主真人歌一首

後尔之人乎思久四泥能埒木綿取之泥而好住跡其念

（6・一〇三二）

右案 此歌者不有此行之作乎 所以然言 勅大夫從河

口行宮還京 勿令從駕焉 何有詠思泥埒作歌哉

狹殘行宮 大伴宿祢家持 作歌二首

天皇之行幸之隨吾妹子之手枕不卷月曾歷去家留

（6・一〇三三）

御食國志麻乃海部有之真熊野之小船尔乘而奥部傍所見

（6・一〇三三）

美濃國多藝行宮 大伴宿祢東人 作歌一首

從古人之言來流老人之變若云水曾名尔負瀧之瀨

（6・一〇三四）

大伴宿祢家持 作歌一首

田跡河之瀧平清美香從古宮仕兼多藝乃野之上尔

(6・1035)

不破行宮 大伴宿祢家持 作歌一首

關無者還尔谷藻打行而妹之手枕卷手宿益乎(6・1036)

この一連の歌群の中において、6・1030〜1031番歌の二首が後補であるという指摘があり、筆者もこの結論を正しいと理解するものである(注2)。即ち、家持歌を中心とする原初歌群「6・1029/1031〜1036番歌」に、何時の段階かで「1030〜1031番歌の二首」が増補されたものが現行歌群であり、今回組上に載せる1031番歌は後補の倭歌である。この増補については当稿の「四」、「今案」「案」の問題について」において考察する。

二、本文認定について

まず、該当萬葉歌の本文とその訓みを認定しよう。

丹比屋主真人歌一首

後尔之人乎思久四泥能埒木綿取之泥而好住跡其念

(6・1031)

右案 此歌者不有此行之作乎 所以然言 勅大夫從河

口行宮還京 勿令從駕焉 何有詠思泥埒作歌哉

この一首については、その本文認定・訓に関して、問題点二

件(以下のa・b)が存している。これらについて、まず確定しておきたい。

二a、第五句本文の「好住」について

第五句の「好住跡其念」における「好住」については、『萬葉集』古写本において、「將住」とするものと、「好住」とするものとに分かれる。以下の通りである。

將住 古・西・溫・矢・京・宮・附・寛

好住 元・廣・類・紀・細・無 (注3)

これが『萬葉集』の注釈書レベルになると、「將住」「將往」「好住」「好往」の四通りの解に分かれることになる。「將」か「好」かという違いに加えて、「住」か「往」かという誤字説が加わっている。その具体的な様相は次の通りである。

將往 ゆかん 童蒙抄・金子評釈

好往 サキク 萬葉集古義(頭注)・窪田評釈・佐佐木評釈

將住 サキク 鴻巣全釈

好住 サキク 定本・全註釈・私注・大系・注釈・全集・

中西全訳注・全注・新編全集・釈注・新大系・
和歌大系・全歌講義

これについては、古写本系統から次点本系統の本文である「好住」の信頼度が高いことに加え、用語「好住」に関して唐代の口語であるという指摘があり、本文「好住」は、この両側面から確かなものであると見てよい。即ち、本文は「好住」で、そ

の訓は「サキク」となる(注4)。しかしながら、例えば鶴久氏・森山隆氏編『萬葉集』(注5)が「好往」の本文を取っていると
ころから、私自身において、これまで無批判にも「好往」の本文
にしてしまっていた(注6)。

二b、第二句「思久」第五句「念」の訓について

この第二句「思久」及び第五句「念」の訓については、吉井
巖氏の『萬葉集全注』が指摘していることにつくる(注7)。

思はく オモフ(四段)のク語法。オモハク「……」トオ
モフの形の表現で、「……」の中にオモフ内容を述べている。
シノハクとよむ童蒙抄以下の説が多いが、直接引用文の前
後をオモフの同語で訓んだ旧訓が一般的である。

即ち、

・八隅知之 吾大王乃 高敷為 日本國者……物負之 八
十伴緒乃 打経而 思煎敷者「天地乃 依會限 萬世丹
榮將往」迹 思煎石 大宮尚矣 特有之 名良乃京矣……
(6・一〇四七、田辺福麻呂「悲寧樂故郷作歌一首」)
・從古 言續来口「戀為者 不安物」登 玉緒之 繼而者
雖云 處女等之 心乎胡粉 其将知 因之無者 夏麻引
命方貯 借薦之 心文小竹荷 人不知 本名曾戀流 氣
之緒丹四天 (13・三二五、作者未詳)

・里人之 吾丹告樂「汝戀 愛妻者 黄葉之 散乱有 神
名火之 此山邊柄 烏玉之 黒馬尔乘而 河瀬乎 七湍

波而 裏觸而 妻者會」登 人曾告鶴

(13・三三〇三、作者未詳)

・大王乃 等保能美可度曾……己比能美豆 安我麻都等吉
尔 乎登賣良我 伊米尔都具良久「奈我古敷流 曾能保
追多加波 麻追太要乃 波麻由伎具良之 都奈之等流
比美乃江過豆 多古能之麻 等妣多毛登保里 安之我母
乃 須太久舊江尔 乎等都日毛 伎能敷母安里追 知加
久安良婆 伊麻布都可太末 等保久安良婆 奈奴可乃乎
知波 須疑米也母 伎奈牟和我勢故 祢毛許呂尔 奈孤
悲曾余」等曾 伊麻尔都氣都流

(17・四〇一一、大伴家持「思放逸鷹夢見感悦作歌一首」)

・宇知比左須 美也古乃比等尔 都氣麻久波「美之比乃其
等久 安里」等都氣己曾 (20・四四七三、山背王

といった首尾照応(注8)する引用の訓法によつて、従来一般に
訓まれていた次の事例、

……ひとをしのはく……おもふ 童蒙抄・全註釈

……ヒトヲシヌハク……モフ 古義

……ヒトヲシヌバク……オモフ 井上新考・全釈・総釈・
金子評釈・窪田評釈・私注

……ひとをしのはく……念ふ 佐佐木評釈

……ひとをしのはく……おもふ 大系・全集・完訳・中西
全訳注・新編全集・新大系・全歌講義

ではなくて(そういった訓法も許容事例としては認められるものではあ
るが)、より明確な「おもはく……おもふ」の訓がより良いこと

になる（この第五句は字余り法則に合致し、問題はない）。即ち、

……ひとをおもはく……おもふ

注・和歌大系

旧訓・注釈・全注・釈

という江戸期以前の古訓と、比較的最近の訓みが良い。

以上により、該当歌は以下の本文と訓として確定できる。

丹比屋主真人歌一首

後尔之人乎思久四泥能埒木綿取之泥而好住跡其念

（6・一〇三一）

右案 此歌者不有此行之作乎 所以然言 勅大夫從河

口行宮還京 勿令從駕焉 何有詠思泥埒作歌哉

丹比屋主真人の歌、一首。

後れにし人を思はく四泥の埒木綿取りしでて好住とそ念ふ

（6・一〇三一）

右、案ふるに、此の歌は、此の行の作に有らざるか。然言ふ所以は、勅ありて、大夫を河口行宮從り京に還へしたまひ、從駕せ令ること勿し。何にそ思泥の埒を詠み作れる歌、有らむや。

三、作者の問題について

当該歌については、題詞が提示するこの歌の作者と左注の指摘している問題点とがある。即ち、題詞には「丹比屋主真人歌一首」とあり、作者を多治比真人屋主であるとしている。その

用字「丹比」と「多治比」は交用される。題詞に見られる「真人」姓を後に置くのは「先名後姓」（公式令 68「授位任官」条の敬称法であり、筆録者による敬意の表明である。ところが左注には「此の歌は、此の行の作に有らざるか。然言ふ所以は、勅ありて、大夫を河口行宮從り京に還へしたまひ、從駕せ令ること勿し。何にそ思泥の埒を詠み作れる歌、有らむや」とあって、歌詠は天平十二年の行幸時ではないとしている。このことに関わって、当該歌の作者は丹比真人家主であり、やはりこの天平十二年の行幸時の歌であったのは、土佐国の学者鹿持雅澄であった。即ち、丹比真人屋主と呼称のよく似た人物に丹比真人家主がおり、この二人は別人である。『萬葉集』の題詞が丹比真人屋主としているのは、丹比真人家主の誤写であるとするものである。

鹿持雅澄の所説は後で詳しく見るとして、研究史においてこの問題がどのように扱われているかについて、まずは整理しておこう。古く『萬葉代匠記』は、「書家主或屋主」（初稿本）として、屋主と家主を同一人と見ている。『萬葉集古義』の後は、井上『新考』や金子『評釈』が古義説を踏襲するが、多くの注釈書は判断保留に近く、この問題を避けている。そうした中で、『私注』は一案として「屋主、家主の混同もあつたとも考へられる」とし、『注釈』は「屋主の別時の作と見るよりも家主の作を誤り傳へたと見るべではなからうか」とする。これらは『古義』説に近い考えであるが、『古義』が誤写とするのに対して、

混同とか誤伝とするものである。その後、中西『全訳注』も「混同か」とし『釈注』は「歌を筆録した最初から、「家主」を誤ったものらしい」としている。吉井『全注』巻第六は、「題詞にみえる丹比真人屋主と似た名をもつ人に丹比真人家主があり、二人が別人であることは松崎英一（注9）が述べているが、このことはすでに古義以来指摘されてきたことでもあった。」としつつも、位階昇進より見て『続日本紀』に誤記があるとして、題詞のままが良いとする。なお、二人が別人であるという認定は、早くに岸本由豆流の『萬葉集攷證』が「さらに別人也」と指摘している。

以上見てきたところによると、まず最初に『萬葉集古義』が問題提起した。これは研究史の上で大きく位置付けてよい。この鹿持雅澄の『萬葉集古義』の翻刻は、一般には極めて忠実であるが、この箇所については、翻刻上、大きな誤認がある。鹿持雅澄自身が、当初は『続日本紀』に載る丹比家主と丹比屋主とを混同し、執筆中にこの誤認に気づき、誤認箇所を見せ消すにして、修訂執筆しているのである。このことはその原本（『稿本』注10）から判明する。その修訂が錯綜気味であり、よく読みこまないとわかりにくいものとなっている。この箇所について、現行の活字翻刻本は、その全てが宮内省蔵版の和装本に依拠して翻字しており、全てこの誤認本文となっている。私が確認したものは、次の通りである（刊行年月は、該当歌所収の巻第六の翻刻所収巻のものである）。（翻刻出版の確認については、NACSIS Webcat によ

った。

- ・「明治二十四年版」（和装版本）（宮内省蔵版、一八九一年一〇月）
- ・「明治三十一年版」（和装活字本）（吉川半七、一八九八年七月、注11）
- ・「大正二年版」（国書刊行会、一九一三年一月）——明治三十一年版の再版と明示。
- ・「昭和三年版」（名著刊行会、一九二八年四月）
- ・「昭和七年版」（精文館、一九三二年六月）
- ・「昭和二十年版」（目黒書店、一九四五年二月）

こういう次第であるので、今、この該当箇所について、『稿本』によって復元翻字して左に示す。

丹比屋主真人は、今按に、屋主は家主を寫し誤れるなるべし、さるは家主といふ人も、屋主といふ人も同時にありて、官位も大かた同じほとに歷たれば、ようせずは、混るばかりなれば、注者等多くは是を同人と意得ためれど、よく見れば決して別人にて、家主はイヘヌシ、屋主はヤヌシト唱へしなるべし、さてこれを同人と意得たるより、ゆくりなく後に寫し傳る人の、家を屋と誤れるなるべし、殊に屋主は、集中にも、八卷^八に、大藏少輔丹比屋主^{ニヒノミヤ}真人と見えたとれば、同人と思ひ混ひしもうべなり、さてかくいふ所以は、次に続紀を引る如く、家主は、此度の行幸に、從駕^{ニミヤツカ}まつれるよし見えて、屋主は見えざれば、きはめて家主なるべし、家主は、続紀に、元正天皇養老七年九月己卯、出羽国司正

六位上多治比真人家主言、云々、聖武天皇天平九年二月戊子、正六位上多治比真人家主授從五位下、十二年十月壬午、行幸伊勢國、十一月丁酉、進至鈴鹿郡赤坂頓宮、甲辰詔陪從云々等、賜爵人一級、從五位下多治比真人家主授從五位上、十三年八月丁亥、從五位上多治比真人家主為鑄錢長官、孝謙天皇天平勝宝三年正月己酉、從五位上多治比真人家主授正五位下、六年正月癸卯、天皇御東院宴五位已上、有勅召正五位下多治比真人家主云々、於御前即授從四位下、天平宝字四年三月癸亥、散位從四位下多治比真人家主卒と見えたり、屋主の傳は、八巻に至りて委注べし／屋主は續紀に聖武天皇神龜元年二月壬子正六位上多治真人屋主授從五位下、天平十七年正月乙丑從五位上、十八年九月己巳從五位上多治比真人屋主為備前守、二十年二月己未正五位下、孝謙天皇勝宝元年閏五月朔為左大舍人頭と見えたり、同時に多治比真人家主といふ人有て、官位も大かた同じほとに歷たれはいと混らはし別人なり紛ふへからず

この丹比真人家主と丹比真人屋主とを『続日本紀』等によって両者対照して示すと次頁の表のようになる。

『続日本紀』の記事自体に混乱があると考えると、基礎データに揺らぎが生ずることになり、それは採らない。次頁の表「家主屋主―両者対照」によって考えると、以下の結論となる。

まず、多治比真人家主と多治比真人屋主とは別人であるとい

うことを確認しておきたい。これは、丹比真人屋主に関して神龜元年（七二四）二月壬子条に「天皇臨軒」とあり、正六位上から從五位下への昇叙記事があり、一方、丹比真人家主についてはその十三年後の天平九年（七三七）二月戊午条に「天皇臨朝」とあり、正六位上から從五位下への昇叙記事があつて、両者が別人であることは明らかである。これは多くの本が認めるところである。武田祐吉氏は、「兄弟で屋主の方が兄ででもあつたのだらう」（『全註釈』）とするが、兄弟なのかどうか、そこまでは踏み込むことが出来ない。ただ同一人物であるとする『萬葉代匠記』の見解は否定して良い。吉井巖氏の『全注』のように『続日本紀』の記事自体に誤記を見る見解は、その後の叙位次第から見ても苦しいこととなつて来る。

ただし、丹比真人家主は、

參議兵部卿從三位多治比真人長野薨。長野、大納言從二位池守之孫、散位從四位下家主之子也。

（『続日本紀』延暦八年十二月己丑条）

從二位大納言多治比真人池守薨。左大臣正二位嶋之第一子也。

とあり、次の系譜を辿ることの出来る人物である。

左大臣正二位嶋——（第一子）從二位大納言池守——家主——參議從三位長野

このように、当時にあつて著名な一族であり、吉井巖氏が不審を言う叙位の遅れは、確かに認められるのである。

表【家主・屋主―両者対照】

*表注記Ⅱ天平九年某月の但馬国通過記事は、正倉院文書「但馬国正税帳」（『大日本古文書』一）、『正倉院古文書影印集成・二』正集第二九卷）による。『続日本紀』以外の文献は他に『萬葉集』がある。

多治比真人家主

出羽国司家主上申。四六駢儷体の名文。

多治比真人屋主

正六位上 ↓ 從五位下

養老七年（七二三）九月
神龜元年（七二四）二月
天平九年（七三七）二月

正六位上 ↓ 從五位下

天平九年（七三七）某月

因幡国赴任のため但馬国を通過（*）。

天平十二年（七四〇）十一月

赤坂頓宮で。從五位下 ↓ 從五位上

「勅大夫從河口行宮還京」（萬葉一〇三一左注）

Ⅱ「四泥能埒」の歌『萬葉集』6・一〇三一Ⅱ

天平十三年（七四二）八月

鑄錢長官

天平十七年（七四五）正月

從五位下 ↓ 從五位上

天平十八年（七四六）九月

備前守

天平二十年（七四八）二月

從五位上 ↓ 正五位下

天平勝宝元年（七四九）閏五月

左大舍人頭

天平勝宝三年（七五一）正月

從五位上 ↓ 正五位下

天平勝宝六年（七五四）正月

正五位下 ↓ 從四位下

天平宝字四年（七六〇）三月

卒。

……年次未詳……

詠歌一首（『萬葉集』8・一四四二、大藏少輔）

さて、右により、『萬葉集』該当歌の左注の記述から、伊勢国河口の地点まで、両者は陪従していたが、河口の地で多治比真人屋主は、何らかの事情によって、都に戻されたと考えるのが良からう。『萬葉集』当該歌の左注に「勅大夫從河口行宮還京、勿令從駕焉。」とあるのは行幸從駕者であれば誰しも記憶にあることであろうし、この記述は信を置くことの出来るものと考えられる。加うるに、このことと『続日本紀』の赤坂における叙位記事は整合している。即ち、多治比真人家主は叙位記事中にその名があり、多治比真人屋主は叙位記事中にその名が確認できない。この叙位は、陪従有位者全員（五十一名）に対してのものであり、赤坂の地において多治比真人屋主が行をともししていなかったことは確かであると見てよい（注12）。

従って、当該歌左注が指摘する通り、当該歌を『萬葉集』題詞の記述のままの形で理解することは困難となってくる。

可能性としては、題詞における錯誤が妥当しよう。即ち、当該歌左注は別の時点での詠作であると提起しているが（「右案、此歌者不有此行之作乎」）、そのことよりも、題詞における「丹比屋主真人」は「丹比家主真人」の誤認であると見ることにの方に蓋然性がある。ただし、それが誤写に起因するものであるのか、混同なのか、誤伝なのかは、判然としない。原因究明はさておいて、何らかの誤認錯誤事項があつて、両者の取り違えが起きていると判定するのがよい。

丹比真人屋主には、『萬葉集』巻第八にその第二子（丹比真人乙

麻呂）の詠歌（8・一四四三）と共に自身の詠歌（8・一四四二）が載り、その歌は紛うことなく、丹比真人屋主自身の作であると確認できる歌が存在している。

大藏少輔丹比屋主真人歌一首

難波邊尔 人之行礼波 後居而 春菜採兒乎 見之悲也
(8・一四四二)

丹比真人乙麻呂歌一首 屋主真人之第二子也

霞立 野上乃方尔 行之可波 鶯鳴都 春尔成良思
(8・一四四三)

偶然ではあるが、右の彼の詠作中には、「後居而」(8・一四四二)の表現がある。しかしながら、そういう表現上のことを考えるならば、一方の多治比真人家主には、養老七年(七三三)九月に、出羽国司としての上申の「解」が残っている。その経緯が記されているだけではなく、その「解」の文章自体が『続日本紀』に記録されているのは、これが名文と認められていたからであろう。その「解」は以下の通りである。

家主言、「蝦夷等惣五十二人、功効已顕、酬賞未霑。仰頭引領、久望天恩。伏惟、芳餌之末、必繫深淵之魚、重禄之下、必致忠節之臣。今夷恩闡、始移奔命。久不撫慰、恐二解散。仍具狀請裁」。有勅、随彼勲績、並加賞賚。

（『続日本紀』巻第九、養老七年九月己卯条）

とある。四字句を柱とするのは「解」の常であるが、中に四六駢儷体を交えていて、この文には帝も感じ入られたことである

う。当該歌第五句には「好住跡其念」とあり、「好住」という中国通としての当時の口語が使用されており、相通じるところがあると指摘できる。

即ち、こうした表現の面からだけでは、両者共に決め手に欠けることになる。

結論としては、当該の『萬葉集』巻第六の一〇三一番歌の作者は、多治比真人家主であるという『萬葉集古義』の指摘に落ち着くことになる。

さて、当該歌の左注についての言及が注釈書にある。今一度、当該左注をここに引こう。

右案 此歌者不有此行之作乎 所以然言 勅大夫從河
口行宮還京 勿令從駕焉 何有詠思泥埒作歌哉

『釈注』において、「左注は…中略…前歌の作者家持とは無縁の、後人が書いた文章なのであろう。」(一〇三〇番歌条)、「先にも述べたように、このあたりは家持が提出した資料と思われるが、一〇三〇〜一には同行した家持ならば犯しそうな不審が多い。一〇三〇〜一は、巻六の形成をめぐって、後考を俟つべき点が多い。」(一〇三二番歌条)と伊藤博氏は指摘している。

その「巻六の形成をめぐって、後考を俟つべき点」が、当稿の「はじめに」で示したように、既に影山尚之氏と新沢典子氏によつて、提示されている。即ち、6・一〇三〇〜一〇三一番歌の二首を別資料とすれば、6・一〇二九〜一〇三六番歌は同伴家持の歌と大伴東人の一首(6・一〇三四)になり、家持の個人

的色彩の強い歌群であつたことになる。これに、後になって、該当の二首資料が原資料のままに切り継がれたのである。この間の経緯について、次で詳しく考えてみたい。

四、「今案」案の問題について

ここでは、影山尚之氏と新沢典子氏の成果の上に立つて、6・一〇三〇〜一〇三一番歌における増補構造について、考察したい。両論にはそれぞれに論としての趣意があることは承知しているが、今はそれを横に置き、6・一〇三〇〜一〇三一番歌が家持歌群に増補されているという形成的側面のみをベースにして、以下の考察を行なうものである。

さて、「原初歌群」(Ⅰ)は、「6・一〇二九／一〇三二〜一〇三六番歌」(題詞については後に言及)である。これは大伴東人の一首を含むが、大伴家持の歌群と言つてよいものであり、「家持の手控え歌群」である。これに「増補歌群」(6・一〇三〇〜一〇三一番歌)があり、増補された結果が現行の歌群(6・一〇二九〜一〇三六番歌)である。この「増補歌群」を今一度掲出すると次のようになる。

天皇御製歌一首

妹尔戀吾乃松原見渡者潮干乃渚尔多頭鳴渡 (6・一〇三〇)

右一首今案 吾松原在三重郡 相去河口行宮遠矣 若疑

御在朝明行宮之時 所製御歌 傳者誤之歟

丹比屋主真人歌一首

後尔之人乎思久四泥能埒木綿取之泥而好住跡其念

(6・1031)

右案 此歌者不有此行之作乎 所以然言 勅大夫從河
口行宮還京 勿令從駕焉 何有詠思泥埒作歌哉

この二首の左注に留意すると、「今案」とあるものと「案」とあるものが存在し、「右一首今案」(6・1030左注)と「右案」(6・1031左注)とはレベルが同一でないことを示している。

この「今案」については、城崎陽子氏に研究がある(注13)。即ち、『萬葉集』中に見られる「今案」事例全一七件について検討した成果であり、城崎氏はその全一七件の「編・施注者」について、A・B・C・D区分を示している。即ち、巻第一の三件と巻第二の一件(2・165〜166)を「編・施注者A」とし、残る巻第二の一件(2・90)と巻第三・巻第四・巻第六(巻第八…ただし用例はない)の九件を「編・施注者B」とし、巻第十三の二件を「編・施注者C」とし、巻第十六の一件を「編・施注者D」としている。この論中において、個別事例の分析が詳しくなされているのであるが、なぜか当該歌群である一〇三〇番歌左注については、避けるかの如く記述がない。しかしながら、「巻三、四、六をひとくくりにする」「編・施注者B」の態度」とあって、巻次編纂論から右の結論が導き出されている。この「編・施注者B」が誰であるのかということについての推測はさておいて、この注記は巻第三・巻第四・巻第六(巻第八)が編

集された最終段階における注記であるという見通しをつけることが出来る。これに対して、一〇三一番歌左注における「右案」から始まる注記は、それとは「手」が違い(「今案」と「案」という用語の違いによる)、「手」が違うということは施注時期が異なるということになる。

以上のことを確認した上で、この巻第六の一〇二九〜一〇三六番歌の増補形成過程について、合理的な解釈を施したい。

第一次形成(原初歌群を基にする歌群)(I)

河口行宮内舍人大伴宿祢家持作歌一首・「歌」(6・1029)
狹残行宮大伴宿祢家持作歌二首・「歌」(6・1031・1033)
美濃國多藝行宮大伴宿祢東人作歌一首・「歌」(6・1034)
大伴宿祢家持作歌一首・「歌」(6・1035)
不破行宮大伴宿祢家持作歌一首・「歌」(6・1036)

第一次形成(I)は、右のように、「〇〇行宮」という作詠地と共に、作者名が記され、家持を中心とした歌群で構成されているものである。

第二次形成(増補歌群の切り継ぎ)(II)

右のIに、次の二首が増補された。

天皇御製歌一首・「歌」(6・1030)

丹比屋主真人歌一首・「歌」(6・1031)

これは、新沢典子氏が「家持が手控えにあった自らの歌を、

行程順に整理し、その後、歌に含まれる地名を参考に、他の歌人の歌を挿入していった（注14）と指摘しているものであるが、その挿入者が家持であるか否かは今措いて、新沢氏が指摘するように、まさに「行程順に」一〇三〇～一〇三一番歌が切り継ぎの形で増補挿入されたものである。よって、一〇三〇番歌も一〇三一番歌も「河口行宮」での詠歌ではないのであるが、結果的にI歌群の「一〇〇行宮」の規制を受けることになってしまったのである。

第三次形成（一〇三〇番歌左注の施注）（Ⅲ）

右のⅡに、次の一〇三〇番歌左注が施されることになった。

右一首今案 吾松原在三重郡 相去河口行宮遠矣 若疑御在朝明行宮之時 所製御歌 傳者誤之歟

Ⅱは、単に行程順に増補されたものに過ぎなかったのであるが、結果的に「一〇〇行宮」の規制を受けることにより、この一〇三〇番歌が「河口行宮」での詠歌ということになってしまった。これをおかしいと理解した「編・施注者B」が「吾松原在三重郡。相去河口行宮遠矣。若疑御在朝明行宮之時、所製御歌、傳者誤之歟。」と書き込んだのである。一〇三〇番歌の「妹ル戀吾乃」は、その下の「松原」に冠する単なる序詞であり、もとより「吾乃松原」という地名ではないが、それを三重郡に存在する「吾松原」（赤松原）のことであると誤解した施注者が疑問を提示したものである。「赤松原」は、「大安寺伽藍縁起并流記

資材帳」（注15）に「三重郡赤松原百町」と見える三重郡の地名であり、それをこの施注者は知っていたのである。この注記の施注は、「十五卷本萬葉集」の基幹となる巻である巻第三・巻第四・巻第六・巻第八が形成された時点であろうと考えられる。

第四次形成（一〇三一番歌左注の施注）（Ⅳ）

右のⅢに、次の一〇三一番歌左注が施された。

右案 此歌者不有此行之作乎 所以然言 勅大夫從河口行宮還京 勿令從駕焉 何有詠思泥埒作歌哉

この一〇三一番歌左注が施された時期は、「十五卷本萬葉集」の段階か、或いは二十卷本の形成時かのどちらかであろう。この注記者は、一〇三一番歌の「四泥能埒」の位置をよく知っていたのである。「四泥能埒」の位置を知らなければ、「河口行宮」での詠歌という理解でも全く問題は無いのであるが、その位置をよく知っているが故に、疑問が生じたのである。また、左注の中に「勅大夫從河口行宮還京、勿令從駕焉。」とあり、施注者はこの行幸從駕の一人であったのである。となると、可能性としては、これは「大伴家持の手」ということになる。『完訳』は、「この左注も家持の記入であろう」と指摘している。と共に、「此歌者不有此行之作乎。」と疑義を表明しているのは、「第二次形成（Ⅱ）の増補に関与していないことを明らかにするものでもある。この行幸時の詠歌ではない可能性を指摘しながらも、この一首を切り出して（即ち削除して）いないのは、そこまです

ることに躊躇するものがあつたからであらう。わずかにこの左注を書き加えるにとどまつたのであつた。この「第四次形成」(IV)によつて出来た形が現況である。現在見る形は、この四段階を経ていることが、論理的に指摘できるのである。

なお、歌群全体に冠する形になる題詞「十二年庚辰冬十月、依大宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發軍、幸于伊勢國之時、」は、ⅢかⅣのいずれかの段階で付されたものに違いない。可能性としては、一〇三一番歌左注で「此行之作」ということを気にしている第四次(Ⅳ)ではなからうか。この「依大宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發軍」というのは、当時における一般的な歴史理解ではなくて、天皇行幸の目的を理解していない曲解に基づいた記述であるが、若い内舎人の一員に過ぎなかつた末席の同伴家持にとつては無理からぬ理解であつたということにならう。

五、表現上の問題について

ここで、当該歌「後れにし人を思はく四泥の埦木綿取りして好住とそ念ふ」(6・一〇三二)の倭歌表現上の問題について確認し、当該歌の意味するところについて、押さえない。

五a、「おくる」という表現について

動詞「遅る」(下二段)の『萬葉集』中での用例は二十七例ある。それらを検討すると、「後に残っている、留守をする」とい

う意味用法(位置・空間上の意味用法)が圧倒的に多い。そうした中で、次の二例は、現代の「遅れる」という時間上の用法と同じものと理解してよいであらう。

・葦屋之 菟名負處女之 八年兒之 片生乃時從：中略：

打歎 妹之去者 血沼壮士 其夜夢見 取次寸 追去祁

礼婆 後有 菟原壮士伊 仰天 叫於良妣 躑地 牙喫

建怒而：下略： (9・一八〇九、高橋虫麻呂

・春雨尔 毛延之楊奈疑可 烏梅乃花 登母尔於久礼奴

常乃物能香聞 (17・三九〇三、大伴書持

「後に残っている、留守をする」という意味用法から、「人が出かけるのに遅れをとる」という派生用法が出来、恐らくそこから現代的な意味用法「遅れる」が出来たものであらうと考えられる。右に挙げた二例の内、高橋虫麻呂の「見菟原處女墓歌一首」(9・一八〇九)は、菟名負處女が黄泉への旅立ちを血沼壮士に夢で告げて逝去したところ、血沼壮士がその跡を追う形で逝去した場面であり、「後有る菟原壮士」の「後る」は、まさに「遅れをとる」という時間用法における意味と理解してよい。

ただし、この箇所 understanding については、諸注において、揺れがある。『注釈』までの諸注は、「あとに残った」「後に残された」と位置空間での理解となつてゐる。『大系』本は、『注釈』より早い本であるが、「後れた」とし、以後、「先を越された」(全集・完訳・新全集、「死におくれた」(久松秀歌、「後れをとった」(集成・中西全訳注・釈注)と時間上の解釈が最近の注釈書の主流とな

つて来ている。ただし、稻岡耕二氏の『和歌文学大系』本は「残された」とし、金井清一氏の『全注』も「取り残された」とし、『新大系』本も「あとに残された」と位置空間で解釈していて、現今においても解釈上の揺れがある。長歌であり語注事項が多いからであろうが、どの本にも語注は無く、その現代語訳で示されているのみである。「遅る」は自動詞であり、位置空間上の意味で訳すのであれば、「後に残った」となり、「残された」の解は無理であろう。その意味からも時間上の解釈の方がこの歌においては無理のないところであると考えるものである。

次に大伴書持による梅花を詠んだ六首中の一首(17・3903)は、「共におくれぬ」という打ち消し形での例ではあるが、楊も梅も共に、春雨に「遅れをとることはない」とあって、やはり位置空間上の意味ではなくて、時間用法としての事例であると理解できる。この歌については、諸注において揺れることなく時間用法と解釈しているが、語注が無い中で、わずかに『全集』本の頭注に、「梅の花は花のうちで最初に咲くものだが、その梅と共に遅れずに芽を出す…」とあるのが注意される。

田中重太郎氏は「空間的な「送る」から時間的な「遅る」になつたのは、人間の思考発達上からみても當然である」と指摘している(注16)。

なお、参考までに言及すると、ノコル(遣)の語は、『萬葉集』において、主として「雪」に使用している(「雪」五例、「はだれ」二例、「花」一例)。また、ノコス(遣)の語は、『萬葉集』におい

て、命などに使用している(「壽」二例、「ときじくのかぐの墓子」一例)。

当該歌冒頭の「後れにし人」における「おくる」の語は、当時の一般的な用法である「都に残っている」「留守をしている」の意味であると見てよく、「後れにし人」は家人(あるいは恋人)ということになる。

五b、「しづ」という表現について

当該歌第四句の「木綿取りしでて」の「しづ」(下二段)の語について確認しておこう。この歌が、その地の呼称「四泥能埜」を詠みこんでおり、そのシデの音から第四句の「木綿取之泥而」を導き出している。言うならば、その地の音表徴から動詞「しづ」に転じたレトリックである。この「しづ」(下二段)の語については、

「於下枝、取垂白丹寸手・青丹寸手而」〔訓垂云志殿〕

〔古事記〕上巻、天石屋戸条

「佐加支波仁由不止利志天々……」(神葉に木綿取りしでて)

(神楽歌4)

といった例から、「祭祀の場合に木綿などを垂らすことを表わす」(『時代別国語大辞典上代編』)という語であると見ることが出来る。これを『萬葉集』中の用例で確認すると、旅中の者の行為というよりも、もっぱら、都において留守を守る家人の行為としてあることが確認できる。ここに、当該歌は、旅先にある作

者が、旅程の地「四泥能埒」において、家人の無事を祈っているというところに当歌の特異な側面が浮彫りとなつてくる。このことは、次の「さきく」の語の使用と軌を一にするものである。

五〇、「さきく」という表現について

「さきく」は、「さきくあれ」と祈る語であり、主として旅の無事を祈る語として『萬葉集』中で使用されている。この語の使用例は、接頭辞「ま」を付した形や、訛語形の「さけく」「さく」を含めて、『萬葉集』には三五例ほどがある（注17）。

くさまくらたびゆくきみを佐伎久安礼といはひべすゑつあ
がとこのべに
（17・三九二七、大伴坂上郎女

などは、この「さきく」の語における旅の安全を祈願する代表的な用例である。自らが自身の旅の安全を祈願するという自祝の用例も何例がある。次はそうしたものの一例である。

命をし幸久吉と石流る垂水の々を結びて飲みつ

（7・一一四二、作者未詳）

また、対象物が人間ではない前擬人的用法の事例もある。

樂浪の思賀の辛碕雖幸有大官人の船ましかねつ

（1・三〇、柿本人麻呂

白埒は幸在待て大船に真梶繁貫き又願みむ

（9・一六六八、柿本人麻呂歌集（作者未詳）

旅という非日常の場ではなくて、日常としての相問往来にお

ける事例もある。

絶ゆと云はばわびしみせむと焼大刀の隔付ふ事は幸や吾
が君
（4・六四一、娘子

これは、湯原王と姓氏未詳の娘子との一連の報贈詠（4・六三一・六四二）中の一首であり、日常における起居相問にごく近い事例である。

相ひ見ずてけ長く成りぬ比日は奈何に好去やいふかし吾妹
（4・六四八、大伴駿河麻呂

これは大伴坂上郎女と大伴駿河麻呂との日常的なやりとりの一節であり、「右坂上郎女者、佐保大納言卿之女也。駿河麻呂、此高市大卿之孫也。兩卿兄弟之家、女孫姑姪之族。是以題歌送答相問起居」（4・六四九左注）という著名な説明があり、まさに「送答相問起居」そのものの詠歌であることが判明する。

我がせこは幸座すと廻り来て我に告げ来む人も来ぬかも

（11・二三八四、柿本人麻呂歌集

この歌は起居相問にやや近く、旅中安全祈願にも近いという中間的な用例である。

さて、旅の安全祈願ということとは、ごく当然の行為として理解されようが、事は「当然以前の問題」であった。現在においても、家を離れての旅には危険がつきまとう。往時にあつては、交通事故の恐れこそ無かったものの、行路事故から、追い剥ぎ被害など現在と変わらないものの他に、一番心配なこととして、風土病に罹災することがあった。風土病を端的に言い表わして

六、おわりに——行幸における宴の歌

武田祐吉氏は、「旅にあつて祭をして家人の無事を祈ることは、集中往々にして見える。」(全註釈)と言及する増訂版も同文。「旅にあつて」が「旅をしている家人(夫)があつて」の意であればよく理解できるが、この注は当歌についてのものである。往々にして見えるということについて疑問が残るが、当歌に類した例は、防人歌に見られる。

ちはやぶるかみのみさかにぬさまつりいはふいのちはおも
ちゝがため (20・四四〇二、信濃国防人、神人部子忍男)

同様の詠歌に、常陸国防人である倭文部可良麻呂による長歌(20・四三七二)もある。右の四四〇二番歌は、「母父」^{おもちち}の無事を祈願しているし、四三七二番歌は「毛呂母呂波佐祁久等麻乎須」の解に揺れが存するが、「もろもろヲバさけくと(作者は)まをす」の意であると理解すると、家郷に残っている父母を主とした諸々の人の無事を祈っていることになる。こうした中に当歌も伍すことになるが、当歌の「後れにし人」とは、「後る」を詠む歌の一般からすると、父母というよりは、妻ないしは妻に相当する女性をさしての表現になる。

右に「行路死人」歌のことを挙げたが、防人歌においても、当該歌においても、行路上何の心配もないという旅程が保障された旅における詠歌であることが指摘出来る。防人にあつては、引率者がいて、行路も食糧も心配のない安心した旅程であり、

防人歌はそうした旅程での詠歌である。当該歌の場合には、行幸従駕という、防人以上に旅の上で何の心配もない旅であった。即ち、行路上何の心配もないという安心した、心に余裕をもつた旅における歌であるということが、まず確認できるのである。

「シデの崎」の歌の場合には、一行の者に憂鬱にも覆いかぶさっていた藤原廣嗣の事変に関して、逮捕・処刑という報が河口の地でもたらされている。その心にゆとりを持てたということに加えて、赤坂の地において天皇より一同への叙位があり、軽口が許されるまでに安心感が戻った段階での詠作である。

さて、木綿シデを奉って行旅の安全を祈願するシデの崎の地において、旅歌の詠歌の枠組から離れて、軽口をたく歌をなしているのは、気心の知れた者同士による宴席における詠作故であると位置付けることが出来る。その意味において、詠作地は「シデの崎」であるが、実際の披露地は宴がもたれた狭残行宮(朝明行宮)においてであると考えてよい。なお、「シデの崎」の地については、岡田登氏に述太川の所在に関する考究の中において若干の言及がある(注20)。その位置としては通説の「シデの崎」の地の範囲を出るものではなく、従来の志氏神社の地(四日市市大宮町)を想定してよい(注21)。

狭残行宮(朝明行宮)における宴席での歌となると、大伴家持における二首(6・一〇三二〜一〇三三)と同じ時の作ということになるが、その宴の場は異なり、大伴家持においては内舍人同士の宴席における詠作であり、片や従五位上の丹比真人家主はそれ

なりのハイクラスの宴席の場にあつての詠作になる。そうした場において何首もの歌が披露されたに違いないが、この多治比家主の歌は、通常の詠作とは異なるという珍しさから記録されたものではあるまいか。天皇を囲んでの肆宴における詠作であるとは考えられないだけではなくて、原資料も一〇三〇番歌とは別のものではあつたことであろう。藝ではないが、藝に近い気楽な者同士の宴における笑いを伴う詠作と考えられる。関連して言及すると、聖武天皇の作歌(6・一〇三〇)も、その詠作地は「潮干の瀬にたづ鳴き渡る」という光景を目にすることが出来る地における作であろうが、実際の披露地は宴のもたれたであろう赤坂行宮もしくは狭残行宮(朝明行宮)であり、可能性からすれば、狭残行宮(朝明行宮)におけるものではなからうか。

行幸宴歌については、大宝元年(七〇二)九月から一〇月にかけての文武天皇による紀伊行幸(持統太上天皇も同行)があり、この時の歌が『萬葉集』に二一首収載されている(注22)。これらの歌々について、道中での歌宴において披露されたものであるという指摘が森淳司氏(注23)や村瀬憲夫氏(注24)によってなされている。

宴の開催のされ方は、天平十二年時と異なっていたものであるうし、また歌宴の雰囲気も同じものとは言えないが(注25)、行幸における歌宴という意味においては同じものがある。まさに「行幸宴歌の世界」と称することが出来るよう。当該歌は、聖

武天皇による天平十二年(七四〇)の行幸であり、歴史的背景も異なれば行幸の從駕構成も異なっている。しかしながら、そうした行幸の行程途上において、度々宴席が張られ、詠歌が披露され、その一部が『萬葉集』に記録されて今に残ったと把握できるものである。当該歌はそうした一齣での作品であると位置付けられよう。

なお、研究会の席上において、榎村寛之氏から、一〇三一「番歌(後尔之人乎思久)の(後尔之)」について、この行幸が恭仁京遷都を念頭においての行旅であるということやハイクラスである作者丹比真人家主は出立前から知っていたのではないか、という提起があつた(山田雄司氏からも類同の指摘あり)。即ち、こういう前提を置くと、「後れに^{あづ}し」とは、単に行旅上都に残つたということのみならず、都と共に捨て置かれてしまったというような語感を含むことになつてくるであろう。当該はその解釈を取るものではないが、このような面白い別解が存在することを中心に披露して、結びとしよう。

注

1 歌群全体として「行宮作歌放」(『三重大学日本語学文学』一八号、二〇〇七年六月)があり、また『東海の万葉歌』(おうふう、二〇〇〇年七月)における廣岡担当による該当各項目がある。各歌についての拙稿は、以下の通り。

一〇二九——「天平の風流」(『三重大学日本語学文学』一六号、二〇〇五年六月)。

一〇三〇——「吾乃松原」について(『三重大学教育学部研究紀要』三二卷二号、一九八〇年三月)。

一〇三一——「狭残行宮における大伴家持詠について」(『三重大学日本語学文学』一六号、二〇〇五年六月)。

一〇三二——「狭残行宮における大伴家持詠について」同右。

一〇三四——「多度山美泉と田跡河の瀧」(『三重大学人文学部文化学科紀要』人文論叢二七号、二〇一〇年三月刊行予定)。

一〇三五——「多度山美泉と田跡河の瀧」同右。

一〇三六——「関」歌の横相(『三重大学日本語学文学』一九号、二〇〇八年六月)。

2 影山尚之「聖武天皇「東国行幸時歌群」の形成」(『解釈』三八卷八号、一九九二年八月)。新沢典子「歌に示された聖武朝史」(『巻六・二〇一九〇四』の配列をめぐって)、『名古屋大学国語国文学』九七号、二〇〇五年一月)。

3 『校本萬葉集』四(岩波書店、一九三二年九月)、『校本萬葉集』新增補十三(岩波書店、一九八一年三月)。

4 『定本萬葉集卷第六別記』(『定本萬葉集』二、岩波書店、一九四二年四月)。「口頭言語と書記言語」(『日本語の歴史』3、平凡社、一九六四年四月)。小島憲之「語の性格——外来の「俗語」を中心として」(『境田教授喜寿記念論文集』上代の文学と言語「境田教授喜寿記念論文集刊行会、一九七四年一月」五四九頁。正倉院蔵の『杜家立成雑書要略』(大尾箇所)にも「唯願好々住々(「好住好住」とある(昭和五七年正倉院展図録、二二八頁、参照)。

5 鶴久・森山隆編『萬葉集』(桜楓社、初版一九七二年四月、一九八五

年二月の補訂重版による)。

6 注1所引の『東海万葉歌』(おうふう)における「四泥の崎」の項及び「狭残行宮における大伴家持詠について」(『三重大学日本語学文学』一六号)。

7 吉井巖『萬葉集全注』巻第六(有斐閣、一九八四年九月)。

8 早く本居宣長に指摘がある。「凡て詔ハク云々、曰云々、白云々、云々などある文を訓には、先、初に「詔」曰「白」とよみて、その云々の語の終りに、又ふたゝび、登能理多麻布、登伊幣理、登麻衰須、など云々、辭を訓附るぞ古語の格なる」(『古事記傳』「古記典等総論」訓法の事)。小林芳規「萬葉集における漢文訓読語の影響」(『國語學』五八輯、一九六四年九月、同氏「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓讀の國語史的研究」に加筆所収)。錦織浩文「高橋虫麻呂の表現方法——「語らく」式の引用をめぐって」(『萬葉学会全国大会、二〇〇八年一〇月一八日発表)。所引用例は『要項集』所収の同氏発表レジュメを参照した。

9 松崎英一「統紀位階記事の誤謬・矛盾」(『続日本紀研究』一八七号、一九七六年一〇月)。

10 鹿持雅澄の『萬葉集古義』稿本(即ち、原本)は、その後半部(飛鳥井本)が、東京帝国大学附属図書館に寄託されている時に、関東大震災に遭い焼失してしまった。しかしながら、前半の九卷分が土佐(高知県)の山内家に残存し、その後、山内文庫として高知県立図書館に寄託され、現存している(当該箇所の巻第六はこの中に含まれる)。この原本複製が、高知県文教協会より一九八三年三月に刊行されている。今、これによった。

11 この本に奥付の類は無いが同時刊行と思しい鹿持雅澄の『萬葉集枕詞解』の奥付には、「東京市、吉川半七、明治三十一年(一八九八)十

月発行」となっており、同じ頃の刊行と推定出来る（再版本奥付により「七月」と判明する）。

12 該当条の全文は以下の通り。

○丁酉（十四日）、進至鈴鹿郡赤坂頓宮。○甲辰（二十一日）、詔、陪從文武官并騎兵及子弟等、賜爵人一級。但騎兵父老、雖不在陪從、賜爵二級。授從二位橘宿禰諸兄正二位、從四位上智努王・塩焼王並正四位下、從四位下石川王・長田王・守部王・道祖王・安宿王・黃文王並從四位上、无位山背王從四位下、從五位下矢釣王・大井王・茨田王並從五位上、從四位上大原真人高安正四位下、正五位下紀朝臣麻路・藤原朝臣仲麻呂並正五位上、從五位上下道朝臣眞備・佐伯宿禰清麻呂・佐伯宿禰常人並正五位下、從五位下多治比真人家主・阿倍朝臣吾人・多治比真人牛養・大伴宿禰祐信備・百濟王全福・阿倍朝臣佐美麻呂・阿倍朝臣虫麻呂・藤原朝臣八束・橘宿禰奈良麻呂並從五位上、正六位上多治比真人木人・藤原朝臣清河、外從五位下民忌寸大楯並從五位下、外從五位下菅生朝臣古麻呂・紀朝臣鹿人・宗形朝臣赤麻呂・引田朝臣虫麻呂・物部依羅朝臣人会・高妻太・大藏忌寸広足・倭武助・村國連子虫並外從五位上、正六位上当麻呂・秦前大魚・文忌寸黒麻呂・日根造大田・守部連牛養・酒波人麻呂、外少初位上老志君族古麻呂並外從五位下。○乙巳（二十二日）、賜五位已上施各有差。○丙午（二十三日）、從赤坂發、到朝明郡。

（『続日本紀』天平十二年（七四〇）十一月、赤坂頓宮条）
城崎陽子「『今案』と記すこと―万葉集の編纂論にむけて―」（『國學院大學紀要』四二卷、二〇〇四年二月、同氏『万葉集の編纂と享受の研究』所収）

14 新沢典子、注2所引論考に同じ。

15 「大安寺伽藍縁起并流記資材帳」（『大日本古文書』二、六五四頁）。

正曆寺所藏文書

16 田中重太郎「『おくろ』（送る・後ろ）の發生」（『國語国文』一一卷六号、一九四一年六月）。

17 三三（四番歌第二句中の「無恙」を通常「さきく」と訓んでいるが、この訓の如何によつては、用例数が一例減ずることになる）。

18 多田みや子「行路死人歌」（古代文学講座5『旅と異郷』所収、勉誠社、一九九四年八月、同氏『古代文学の諸相』所収。「河邊宮人」の二歌群（2・二八―二九、3・四三―四三七）を別置したのは、多田みや子氏が相関的表現に終始した異質な歌群であると位置付けていることに従つたものである。なお、「行路死人歌」に関する代表的な論考は、右の多田みや子論に記載があると共に「セミナー万葉の歌人と作品」第二巻の巻末に人麻呂の「石中死人歌」についての論が載る。

19 野田浩子「古代の旅人たち」（古代文学講座5『旅と異郷』所収、勉誠社、一九九四年八月、同氏『万葉集の叙景と自然』所収）。

20 岡田登「壬申の乱及び聖武天皇伊勢巡幸と北伊勢」（皇學館大学『史料』一九一号、二〇〇四年六月）。

21 廣岡義隆「四泥の崎」（『東海の万葉歌』おうふう、二〇〇〇年七月）。

22 この行幸宴歌二一首は以下の通り。1・五四―五六、2・一四三―一四四、2・一四六、9・一六六七―一六八一。村瀬憲夫「大宝元年紀伊国（牟婁湯）行幸歌群をめぐって」（初発一九八六年一月。同氏『紀伊万葉の研究』所収、和泉書院）による。

23 森淳司「巻九・大宝元年紀伊国行幸從駕歌群の考察」（『萬葉研究』創刊号、一九七八年一月）。

24 村瀬憲夫、注22所引論考に同じ。

25 村瀬憲夫氏は注22の論において「遊宴的な気分が漂っている」とし、またその論を受けて展開している『万葉の歌9和歌山』（保育社、一九

八六年八月)においても「華やかな気分を漂わせている」(七〇頁)、「はれやかな気分を反映している」(七一頁)とある。

追記

美夫君志会二〇〇九年四月一二日の例会の席上、大浦誠士、菊川恵三、小林宗治、佐藤隆の各氏から教示を得た。ここに、謝意を表したい。この人数の多い美夫君志例会と共に、小人数による三重大学「伊勢湾・熊野地域研究センター」において、二〇〇九年五月一四日に披露し、教示を仰いだ。この席で榎村寛之、塚本明、山田雄司の各氏から有益な示唆を得、当稿を大きく進展させることができた。衷心より謝意を表すものである。

「ひろおか よしたか 本学教員」